

鎌倉市中央図書館

近代史資料室だより

第9号

鎌倉市中央図書館
近代史資料担当
鎌倉市御成町 20-35
電話 0467 (25) 2611

令和5年度郷土資料展 報告

関東大震災100年

【会期】令和5年(2023年)

9月1日(金)～30日(土)

【会場】鎌倉市中央図書館

1階・3階ギャラリー

【展示概要】

大正12年(1923年)9月1日、午前1時58分、相模湾北部を震源とするプレート型地震、マグニチュード8クラスの地震が関東南部から東京方面を襲いました。鎌倉は一瞬のうちに壊滅し、山は崩れ一時は陸の孤島のような状態になりました。『鎌倉震災誌』(昭和5年鎌倉町役場刊)によれば、被害は鎌倉町で全壊1455戸、半壊1549戸、埋没した家8戸。さらに津波による流失113戸、地震直後の火災で全焼が443戸にのぼり、半焼は2戸、



「長谷・坂ノ下 震災絵図」(作製 渋谷雅子・伊東雅江) 中央図書館1階ギャラリー

死者412名、重傷者341名を数えました。大船(山ノ内を含む)の被害は全壊450戸、半壊80戸、死者18名、負傷者は23名。腰越津村の被害は全半壊合わせて310戸、死者70名でした。深沢村もかなりの被害をうけました。震災後100年に因んで、残された災害写真や記録類、手記等を展示しました。



【ギャラリートーク&地域防災交流会】
9月30日(土) 中央図書館3階多目的室
100年前、私たちの町を襲った大震災の残された写真や記録類、手記などに目を向けながら、現在、地域や学校・家庭で取り組んでいる防災活動について経験交流をしました。材木座、坂ノ下、稲村ガ崎などの地域自治会の方々の参加を頂きました。(上:浪川氏講演「明応4年8月の地震と津波について」 下:被害状況を書き込んだ航空写真や絵図を熱心に見る方々)

目次

◆令和5年度郷土資料展報告「関東大震災100年」	1
◆モニュメント⑨「震災追憶供養塔碑」	3
◆寄贈資料紹介「大船軒資料」	5
◆古文書紹介「青木幸蔵日誌 円覚寺洪鐘祭」	6
◆研究ノート⑦ 鈴木萌花	8
「近世鎌倉仏師の活動に関する一考察」	
◆写真記録集『古都鎌倉へのまなざし』を出版	12
◆古写真(鎌倉カーニバル)	14
◆インタビュー(むかし語り)⑨	15
「広島の被爆体験を鎌倉で語り継いで」	

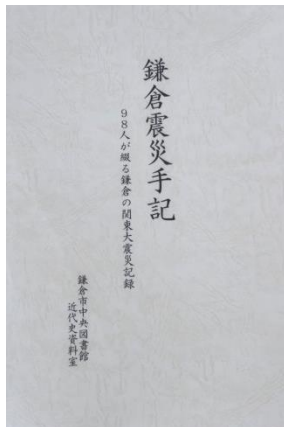
★参考資料―過去の展示資料・発行物等を活用
震災被害記録写真67枚(長谷山辺写真館他
撮影)、リーフレット「90年前の関東大震災」
(2013年9月)、リーフレット「関東大震災
―空からの記録を読む」(2017年9月)、冊
子『鎌倉震災手記』(平成29年3月)等

『鎌倉震災手記』

―98人が綴る鎌倉の関東大震災記録

平成29年3月 図書館編集

当時、鎌倉に住んでいた人たちの震災体験記
を中心にまとめました。市井の人々、別荘の人、
文士の人々、子供たちなどの手記は、震災被害
写真ともつながり、より詳しく災害の様子を理
解することが出来ます。手記をもとに絵を描き、
わかりやすく伝えることも出来ました。



図書館では、さらに手記を追加収集しています。

関東大震災当時の思い出

中山 貞治

開校百周年のご清祥を祝し、卒業生諸氏のご

発展を寿ぎながら校下各位に対して在職中
のご交ぎを感謝し、編集氏からの「震災当時を是非」
とのご注文に応えておぼろげながら稿を進
めて参ります。

大正九年の秋、教師の卵として師範学校から
教生の名によって毎日あの江の電で通学し、当
時の諸訓導から受けたご指導は私の教壇生活
四十年のよい指針であった事は申すまでもあ
りません。

大正十年三月末、正修校訓導を拝命した私は、
当時二十二才の駆け出し青二才教師でしたの
で、受け持たれた児童諸君は、あるいは、迷惑
を被ったのではないか。また私自身も教生指導
の大任を負わされ青春を自己規制して教育道
一筋に生活を絞らなければならぬ苦労もあり
ました。

大震災は大正十二年九月一日正午ごろ、早朝
から風雨があり蒸し暑く、始業の式は無事にす
んで子どもたちは帰宅したあとの事。不幸中の
幸いでした。そろそろ下町の和田さんの下宿に
引き上げようかと用務員の井上さんの部屋で
昼食を取っていた時の突然の出来事で、私は小
窓から外へ飛び出しました。まだ暑中の事とて、
シャツ1枚の姿である。この用務員室というの
は、法源寺よりの校地の隅で、5米ぐらいの崖
に近く、そのそばに用水の車井戸があった。飛
び出したとたん、崖の石積みがくずれ、井戸水

が吹き出して一面の水である。もちろん、平屋
建の校舎は倒壊して立ちのぼるほりの中に
ゆれている。つぶれた校舎の外側にカーテンが
あったので引きさいて足に巻き、つぶれた校舎
の屋根に上り、5、6枚のかわらを取り払って
井上さん家族を呼んだ。何の返事も無い。その
うち子供の泣き声と井上さんの声がする。「早
く出してくれ、出口を作ってくれ、早く早く。」
ほりにむせんでいるらしい。

余震はしきりなくやってきて、私は屋根に上
ったり、おりたりしている。くぎが、足の裏に
さゝって痛い。

そのうち中庭の方から今は亡き杉崎、三浦の
両君が来てくれて、やつとの事で井上さん家族
四人と柿屋の出前持ちの娘さんを引き出した。
おばさんが、相だなげがをしていたが、応急処
置をし、医者をとあせつたが、医者は圧死した
と言ひ、下町方面は目下延焼中との事である。
幸に職員室は腰をかがめて出入り出来る余
地があった。夕方津波避難のために集まってき
た村の方々々と武藤さんの家の前に並んで夕食
のムスビをもらい、その夜は奉還したご影を畑
の中で奉護した。たしか四・五人の若い先生た
ちであったと思う。倒壊と同時に手広の和田先
生はご影を大切に背負ひ、自宅の様子を見てふ
たたび、夜中に奉護の万全をと考えてやって来
られました。

私どもが、奉護申し上げていたものは影の箱であったとか。その真偽は今になってもわからない。

村には先生に支給する給金がない。若い先生は困っていた。後聞したが、和田先生は自己の預金を引き出して若者たちに幾分かをわけてくださったらしい。九月の二十日頃になって、裏山にむしろを敷いて授業を始めたが、アリが落ち葉が、蚊が等々で学習どころのさたではない。

下宿が焼失して行き場のない若者三・四名は新しい二階建て校舎建築中のものが倒壊して残った番小屋を改造し、ここに六十日ほど寝起きた。そして震災死した十余人の子どもたちの位はいを作り、法源寺から仏具の二・三を借用して朝晩供養したことを覚えてる。後日、村主催のり災死した方々の慰霊祭が行なわれた時若い先生方が作った位はいが一役務めたということなど思い出の一つである。

昨年は私が正修校の教壇に立つてから満五十年になったので腰越の学校やご厄介になった和田さんを尋ねてみた。昔の面影もない学校。しかし四囲の山容は変わっていない。私も命永らえてこの稿を誌すに当たり、萬感こもこもいたって、腰越の発展をいのつております。

(出典:『腰小のあゆみ』72.11.26 創立百周年記念誌) 鎌倉市腰越小学校 昭和四十七年)

モニュメント

⑨ 震災追憶供養塔碑

山科宮武彦王殿下題額

令和6年(2024)元旦の夕方、能登半島を中心に日本列島日本海側全体を襲った震度7の大地震は私たちを震撼させた。昨年来関東大震災から100年を振り返る企画で1年を過ごしていた中で新たな大地震である。被災者の方々のご苦勞はいかばかりかと心が痛む。

今回紹介する記念碑は、鎌倉市山ノ内にある



鎌倉五山第一位巨福山建長寺境内に立つ震災供養塔である。境内を山門、仏殿、法堂へと進み、その左手の広場にその碑がある。広場の奥、一段高い所には「震災供養塔」が仏塔の

形で厳かに立っている。しかし階段も古くなり、今は立入禁止であるが、中には祭壇があり、木造の位牌には「関東大震災歿死者各霊位」と書かれているという。その供養塔を建てた由来について綴ってあるのが、左手前に立っている「震災追憶供養塔碑」である。建立年月は昭和五年九月一日、撰文は建長第二百六十七世菅原時保師、題字は山科宮武彦王殿下とある。分厚く大きな仙台石に碑文が刻まれている。

《碑文》

嗟呼大正十二年九月一日人誰か此日ヲ想起シテ戰慄セザルモノアラシヤ午前十一時五十八分大震突如天柱ヲ顛倒シノ地軸ヲ壞滅シ山崩レ海沸キ巨萬ノ生靈億兆ノ財寶ヲ蕩盡シ災禍ノ慘ニシテ大ナル到底筆紙ノ能ク盡ス所ニ非ズ上ハ天潢龍種ノ尊キヨリ下無告ノ窮民ヲ擇バズ骨肉靡亂餘ス所ナク或ハ棟梁墮壁ニ壓セラレ或ハ猛火毒焰ニ焚カレ親ハ子ヲ哭シ子ハ親ヲ喪ヒ夫妻相離レ兄弟相失シ暴力ニ命ヲ殞シタル者無慮十餘萬加之劫火四方ニ起リテ紅燄天ニ連リノ旋風八面ニ舞ヒテ黒煙地ヲ包ミ關東ノ都市殆ト焦土ト化シ伏屍縱橫殘骸山積滿目ノ慘景眞ニ凄愴酸鼻ヲ極メ地獄ノ變相ヲ眼前ニ展開スルニ異ナラズ斯ノ如キハ有史以來未曾有ノ椿事ニ屬シ人天俱ニ悲傷スル所ナリ夫レ娑婆迷溺ノ衆生ニ對シテハ菩薩三時ノ涙尚且ツ暫クモ止マズト況ヤ無數ノ生靈辜ナクシテ現ニ阿鼻叫喚ノ苦難ヲ受ケテ刹那ニノ幽冥ニ赴クニ於テオヤ普濟廣度ヲ旨トルス僧伽ノ本分豈此不幸ナル羣靈ヲ救恤セズシテ可ナランヤ

茲ニ於テカ山僧ノ敢テ自ラ揣ラズ新ニ一浮圖ヲ建立シテ永久ニ罹災殉難諸靈供養ノ壇場ニ擬シ亡靈ヲシテ離苦得樂ノ妙果ヲ獲セシメノ又後祀者ナキ靈位ノ遺骨ヲ収納シテ追福ニ遺憾ナカラシメ更ニ遺族及現在未來ノ人ヲシテ此ノ稀有ノ慘事ヲ追憶シノ人生無常ノ實際ニ覺醒シ長ヘニ幽魂弔慰ノ淨業ニ努メシメント欲ス即チ爰ニ福山ノ淨域ヲトシ如法ノ規模ヲ定メテノ密ニ其工ヲ勅ムルニ値リ事畏クモ 山階宮武彦王殿下ノ令聞ニ達シ特ニ題額下賜ノ恩寵ヲ蒙ル山門ノ光榮豈何物カノ之ニ加ヘン窃ニ惟ミルニ殿下同シ震災ニ妃ノ宮ヲ喪ハセラレ殉難ノ枯骨ニ垂ルルノ令慈持ニ深重ヲ仰キ國民ノ毎ニノ景仰感涙スル所ナリ而モ時宛カモ吾財界未曾有ノ悲運ニ際シ經營頗ル困難ヲ極メ辛酸四星霜ヲ閱スト雖モ幸ニ美術ノ諸大家ノ後援ニ惠マレ爰ニ漸ク造塔ノ功ヲ竣ユルヲ得タリ是レ偏ヘニ佛天冥護ノ致ス所固ヨリ私力ノ如何トモスルノ所ニアラズ仰ギ冀クハ佛陀無量ノ慈慰長ヘニ加祐ヲ垂レ大法無限ノ功德永ク鎮護トナリ近クハ民心ヲ啓沃シ德教ヲノ裨補シ遠クハ幽冥ニ通ジテ津濟窮リナク見聞贊毀均ク此勝緣ニ頼リ圓覺妙果ヲ得ンコトヲ銘ニ曰ク

大地黑漫漫 濤聲叫喚ノ如クナルモ 普門ノ願海深ク
無量ノ寶ヲ藏シテ福祐窮リナク
彌天苦層層 松韻嗚咽ニ似タレドモ 圓通ノ福山高ク
眞如ノ月ヲ現シテ功德長ヘナリ
昭和五庚午歲九月一日

巨福山建長寺第二百六十七世壽仙菅原時保謹撰

造塔主事 謙畝小林誠義拜書

(参照 『竹村雅之他編 神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構 その3』)

碑文中にあるように、題額を書かれた山科宮武彦王殿下は、この地震で由比ヶ浜の別荘に居られた妃殿下が往診中の医師ともども圧死され、特別の悲しみを経験されていた。供養塔建設にあたって題字を賜ったことへの感謝の意が文中に表されている。そのほか建長寺境内には、震災で崩壊した建物の修復を記念して「重修碑」が仏殿を背にして立っている。



「震災追憶供養塔碑」



奥に「震災供養塔」 前は曙観音像

《作家久米正雄手記より》
山科宮妃殿下遭難にふれて
震水火の只中に 久米正雄

(略)

長谷通りは、左側の家々が、通りへ面して倒れてゐて、所々屋根を越えたり、狭い軒端の倒れ鼻を擦りぬけたりしなければならなかった。通りが、りに覗いてみると、海浜ホテルはやゝ

傾いた門柱の中に、傾いてはゐるが崩れ落ちないで、玄関前の松の間に、西洋人たちがうろしてゐた。中には日本ユカタのまゝ、山の方へ逃げて行く夫婦なぞもあつた。

山階宮妃殿下の御遭難を、一の鳥居側の宮邸に隣り住む小野君に会つて聞いたのも、其時、震後一時間と経たぬ中だつた。其時の話では、まだ大妃殿下は梁の下に居られるとの事だつた。が、私はまさかにお助けに入る事も出来ないので、其儘材木座の知人の家へ行つて、其人々だけは無事なのを祝し合ひ、それから近所の倒潰家屋の中にまだ人が入つてゐるのを見て、救出を助力した後、一つばし人を救けた気分が昂奮して、水道路を帰つて来ると、白い海軍将校服をキチンと身につけられ、黄黒色の円い日除けの色目鏡をかけられた、由緒ありげな顔のお方が、矢張り是も黒眼鏡の海軍将校と、もう一両人の伴を連れて、横須賀への海軍水道路を、練つて歩いて来られるのに出会つた。私は屋根を掘つたり、子供を引出した後なので、何だ、どんな海軍の偉い将校か知らぬが、悠長に視察振つてゐると、少し反感めいた眼で見送つたが、後で直ぐそれが宮様と聞いた時は、少なからず恐懼(＊きょうく)を感じた。視察的に、幾らか悠々と感じられる程に歩いて居られたには相違ないが、それが大妃殿下を今の先刻、梁の下に失はれた宮御自身として、其悲しみを

黒眼鏡の下にお隠しになりながら、直ちに出で、震災の状況を視察し、罹災民を慰問に歩かせらるゝ御心を察すると、私が鋤鍬を肩にしなから、其二三名の行列の眞ん中を、わざと突切つて通つた無礼を、何とお詫びしても足りないやうな気がする。

人を救けたなぞと云つても、私はたゞ、屋根を少し剥いだのと、其穴から覗き込んで、注意めいた助言を、「あ、其槓桿（*てこ）の重みが足に懸つてゐる！」と云つた風に、中で救出に従事してゐる人々に、与えてゐたに過ぎなかつたが、それでも赤ん坊の上へ凭伏（*つぶぶ）しになつて、胸の下に子供を庇つたまゝ背中を梁に圧されて、出られないでゐた若い母親が無事に助け出され、それから更に、もう一方の棟の下から、かすかに洩れる泣声をたよりに、矢張り同じく屋根へ穴を掘つて、やうやく其穴の中から、三四歳位になる女の児を、穴の中から外に居る私の手へ、無事に受取つた時は、世にも嬉しい気持だつた。其児は、もう救ひ出された極度の緊張で、泣いてなぞはゐなかつたが、もう忘れたやうに輝いてゐる日光の中へ出されて、目をぱちぱちさせながら喘ぐやうに口を動かして、他人の私に抱きとられつゝ獅噛みつきかゝつた。（略）

（出典…『微苦笑藝術』久米正雄 新潮社）

寄贈資料紹介

大船軒

資料

- ① 古写真（ガラス乾板を含む 竣工写真他）
- ② 建築図面一式（青焼き図面）
- ③ 建築関係資料（見積書・仕様書等）
- ④ 富岡家関係資料
- ⑤ 大船軒弁当掛け紙資料
- ⑥ 大船軒会社経営関係資料
- ⑦ 国鉄関係資料

令和五年七月、大船軒関係資料がJR東日本クロスステーションから鎌倉市中央図書館へ寄贈されました。図書館近代史資料室で活動している「別荘時代研究会」メンバーの協力を得て資料整理に取りかかっています。封筒入れ、目録作成などを経て、二年後を目指して展示などで公開する予定です。



昭和四年大船軒新築日誌



御弁当掛け紙
「サンドウイッチ」「おしすし」「大船名産
ボイルドハム」など

「鰻の押寿司」「サンドウイッチ」の駅弁で有名な「大船軒」は、明治31年（1898）創業以来繁盛し、この地域の味として旅行者や地元の人達に人気を博してきた。しかし業績の悪化を理由に111年後の平成21年（2009）JR東日本のグループ会社傘下に入り、その後令和5年（2023）にJR東日本クロスステーションと経営統合し、弁当製造は戸田市の工場で大船軒ブランドを継承しながら製造を続けている。そして大船駅ゆかりの資料は鉄道博物館に、本社棟に関する図面一式等は鎌倉市中央図書館に寄贈された。昭和6年（1931）建築のレトロモダンな旧社屋兼工場の建物の今後の行方については未定である。



令和五年 円覚寺洪鐘祭

おおがねまつり

円覚寺総門下の庭で張子の鐘を製作中。竹で構造を作り子供たちが紙を貼っている。2023.8.12



祭礼当日(10月29日)撮影 入江麻里子氏



由来…円覚寺の開基北条時宗の遺志を継いで長子貞時が鐘の鑄造を發願したが再度に及びかなわず、円覚寺第6世西澗和尚の教えにより江ノ島弁財天に7日間参籠・祈請した。そこで不思議の示現を受け円覚寺正統庵の池「宿龍池」の底から竜頭のような金銅を得、とうとう鑄鐘に成功した。貞時は感謝を込めて、弁天堂を建て江ノ島より弁財天を勧請した。梵鐘には正安3年(1301)鑄造の銘がある。

【参考文献】

- ・「山ノ内八雲神社 神輿修復記念誌」 小泉権吉郎 昭和62年
- ・「明治卅四年 おおがね祭と先人の足跡」 小泉秀夫・荒井昇 平成5年
- ・「江の島縁起絵巻」 藤沢市教育委員会 平成12年
- ・「円覚寺弁天洪鐘祭附祭絵巻 研究成果報告書」 福原敏男 平成29年
- ・「鎌倉ゆかりの芸能と儀礼」 神奈川県立歴史博物館 平成30年
- ・「特別展示洪鐘祭 六十年に一度の祭礼の記憶」 鎌倉歴史文化交流館 令和5年

【Webサイト】

- ・「洪鐘弁天祭オフィシャルサイト」北鎌倉円覚寺と江ノ島神社の60年に一度の神事・仏事・パレード」円覚寺洪鐘祭実行委員会 (動画配信のアーカイブで当日の様子が見られます)



パンフレット(表面)

研究ノート⑦

近世鎌倉仏師の活動に関する一考察

— 相模国鎌倉郡扇ヶ谷村居住仏師を

例に挙げて— 鈴木萌花

(駒沢大学修士課程)

図書館のサークル活動の一つ「鎌倉別荘地時代研究会」にて報告された鈴木氏令和3年度卒業論文からその一部を紹介させていただきます。全文は近代史資料室で閲覧できます。

目次

はじめに

第一章 近世の鎌倉仏師

第一節 鎌倉仏師の出現と変化

第二節 鎌倉仏師同士の関係性

第三節 近世鎌倉仏師の活動圏—後藤家の場合—

第二章 鎌倉仏師と注文主 —後藤家・三橋家・加納

家・伊沢家を中心に—

第一節 寺院と鎌倉仏師

第二節 大名との交流

おわりに

はじめに

日本において仏像が制作された例は、最古のもので飛鳥時代の飛鳥寺釈迦如来坐像とされている。それ以後、朝廷があった京都・奈良を中心に、中国や朝鮮大陸などから伝来した彫

像の技術を吸収しながら、様々な様式が生み出されていった。鎌倉時代には、源頼朝が幕府を置いたことにより、鎌倉でも仏像が造像される環境が整っていく。そこから江戸時代にかけて、鎌倉の地には仏師として活動するものが20余家もあらわれ、明治時代以降も業績が残る。近年仏像をテーマにした展示や書籍も多くあり、南北朝以前の像や仏師に関する研究は多くみられるが、それに比べて近世以降に京や江戸、その他各地域で活動した仏師の研究は数少ない。

本稿では、近世に活動した仏師のうち、特に相模国鎌倉郡内鎌倉十カ村を拠点とし活動した鎌倉仏師*について、その活動範囲や史料に残された注文主との交流を考察し、近世地方仏師像の実態を捉えようとするものである。第一章では鎌倉仏師の概要や活発に活動した仏師が複数居住していた扇ヶ谷村について触れる。第二章では史料を用いながら具体的に仏師と注文主周辺の交流について見ていく。

第一章 第一節 鎌倉仏師の出現と変化

中世以前、活発に活動し独自の様式を確立した仏師は、近世に入ると運慶の系譜を引く七条仏師らの弟子たちが各地に散らばり自身の工房を構えたことで担い手がかなり増えた。中世

では僧が基本的に仏師として造像に携わったが、近世にはそうでない者も仏師として活動し、江戸などの都市には仏師屋と呼ばれる小さな像を専門に作る者も現れた。こうして江戸仏師、京都仏師などが各地で活動する中で、特に鎌倉十カ村を中心に活動した仏師が鎌倉仏師である。では、特に鎌倉仏師の歴史について盛んに研究された三山進氏*の記述を参照しながら概観していきたい。

鎌倉仏師の拠点である鎌倉の整備が進むのは、鎌倉幕府が置かれて以降のことである。三山氏はこの頃の造像事情について鎌倉時代初期の主な造仏を近畿地方の仏師に頼っている事実も考えると、当時は鎌倉に定住している仏師はいなかった可能性も考えられるとされている。同氏も懸念している通り、この頃の中央の文化を重んじる傾向があることなども考慮する必要はあるが、在地の仏師を起用することが少ないということは鎌倉仏師があまり育っていなかった可能性は考えられるだろう。初期の鎌倉幕府の造像を担った奈良仏師の定朝以後は、同じく奈良仏師の運慶が幕府の造像を担うようになり、独自の様式を完成させ、造仏界に大きな影響を与えた。もちろん鎌倉も影響を

受け運慶様の仏像が作られていく。また、三山氏によると、鎌倉ではそれに加えて、定慶らを導入者として運慶風に多少遅れて「中国宋朝美術の装飾的で人間臭い特色を積極的に取り入れた宋風」が根付いたとし、宋風が「定着してゆくのに伴い、年月は明確に見定められないものの、鎌倉にもしだいに仏師が育ち、仏所(中略)も形作られていった」と述べ、誕生を十三世紀前半ごろと推定した。同時に、弘安二(一二七九年)から弘安六(一二八五)年に成立した「沙石集」には「阿弥随利益事」や「地藏菩薩種々利益事」という話の中で「かめかや」に住む仏師が登場していたり、少なくとも文和四(一一三五)年以前に成立していたとされる光触寺「類焼阿弥陀如来縁起絵巻」にも亀谷仏師の記述があることが指摘されている。このように鎌倉で活動した仏師と見られる記述も残されていることをみると、同氏の指摘にあった十三世紀前半のどこかしらで鎌倉仏師が誕生したということに加えて、「亀谷仏師」を鎌倉を拠点とした仏師であると考えれば扇ヶ谷近辺には十三世紀以降から仏師が居住し始めた可能性が考えられるかもしれない。

同氏が「鎌倉時代を鎌倉仏師の誕生期とすれ

ば、南北朝時代は成長期に当る」と位置付けた十四世紀以降には、今まで中央仏師と比べて起用の機会が少なかった鎌倉仏師が寺院の造像に携わった例が多く見られる。この中には近世にも活躍していく後藤家の系図にある^{***}巴西の事績も残っている。室町時代には、「鎌倉」を肩書きに使う仏師が現れ始める。第一章第一節で述べた通り、江戸時代には中世と比べてかなり多くの仏師が現れ、鎌倉だけでも二十六家以上活動していた。出現する時期はまちまちであるが、多くは十七世紀後半以降に登場するものが多いという。そのような鎌倉仏師の中で特に活動が活発だったのは、後藤家・三橋家であった。次の表からそのことが伺える。各家の事績数を一覧にした【表一】からもそういった特徴が窺える。

【註】

* 本稿では「鎌倉仏師」など銘や史料中で名乗っているものや鎌倉を拠点にして活動した仏師を指す。
 ** 三山進氏は一九六〇年代から鎌倉仏師について盛んに研究された研究者。『鎌倉地方造像関係資料』やその他多く著書や論文を執筆され、鎌倉仏師についての基礎研究を進めたといえる。
 *** 後藤家に伝わる系図で名が見える中世の仏師。文保二(一一三二)年鎌倉市極楽寺療病院本尊薬師如来像を造立したことや、建武四(一一三三)年に東京都あきる野市大悲願寺木造阿弥陀如来坐像を巴西の息子・下野房性円が修理したことを示す銘などが残る。(後藤俊太郎・後藤圭子編『鎌倉彫後藤家四代』百十四ページ)

から百十五ページ参照。)系図には運慶、湛慶、幸有、弘俊、巴西と続く。
 【註】を省略したが、『鎌倉市史近世通史編』を適宜参照している。

【表一】『鎌倉地方造像関係資料』、『鎌倉の彫刻』などにみる近世鎌倉仏師の事績数⁽¹⁵⁾

仏師名	件数	伊沢家	20	今井家	1	加納家	7	菊地(池)家	4	蔵並家	1	後藤家	76	鈴木家	5
仏師名	件数	高橋家	4	立川家	2	中村家	1	浜野家	1	藤倉家	1	三橋家	77	山田家	1

後藤家・三橋家・加納家は「相模国新編風土記稿」に旧家と記されている家である。この三家に加え、伊沢家・高橋家・菊地(池)家が居住していたのが扇ヶ谷村である。鎌倉郡内、特に鎌倉十カ村には仏師が住んだ村はいくつかあったが、特に仏師が多いのは扇ヶ谷村であり、

造像の中心地となっていたようだ。また、扇ヶ谷村に住んだ各家は仏師という共通点を持ちながらもそれぞれ性格は異なっていた。例えば、加納家は仏師業のほか鶴岡八幡宮の経師を代々務めており、近世末期には村名主も兼ねていた。また、三橋家に弟子入りして以降仏師として活動する伊沢家は同社の伶人を務めている。後藤家・三橋家は加納家と共に村内で寿福寺の「世話人」を務めた。(後略)

(第二節 略)

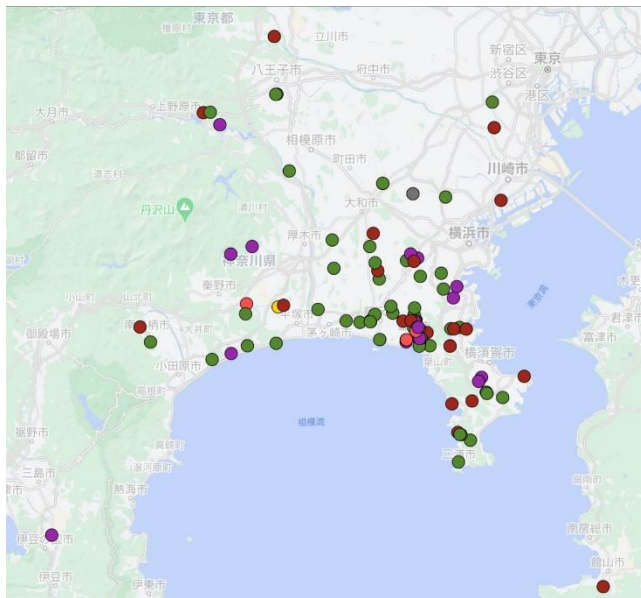
第三節 近世鎌倉仏師の活動圏

―後藤家の場合―

中世、仏師を務めた者は基本的に僧侶身分の者であり、特定の寺院の下について専門に造像を行う形式が多かった。造像を行う工房である仏所には、弟子たちが頭領の指示を受けながら分業して制作を行っていた。近世に入ると、仏師として活動する者は僧侶身分に限られることなく様々な人々が担い手となる。注文の面でも特定の寺院につくのではなく、複数の寺社から受注したり、村や個人からの依頼や仏像以外の位牌や額などの制作も受けている。鎌倉仏師も例外ではなく、そうした活動をしている。しかし、同じ村内に居住した仏師であっても注

文の内情は異なる。例えば、三橋家は在地の寺院からの注文が目立つことに比べて、後藤家はそれに加え大名や鎌倉郡以外の地域からも注文を受けているという特徴がみられる。この節では、近世における鎌倉仏師の活動範囲について【図三】を参照しながら後藤姓仏師を例に挙げてみていく。

【図三】 後藤姓仏師が関わった寺社の造像一覧



【図三】は後藤姓仏師が携わったと読み取れる銘がある仏像を所蔵する寺社の所在地を現在

の地図に落とし込んだものである。これは全てを網羅出来ているわけではないだろうが、この時点でも、鎌倉郡を中心に実績が広がっていることが分かる。後藤家は扇ヶ谷村に仏所を構えていることが分かっているので、木食のような移動しながらそのところどころで注文を受け制作する仏師ではないものの、拠点である鎌倉から離れた現東京都や現千葉県にも単独での実績が残っている。どのような過程で遠方から注文を受けるに至ったのかは現時点では明らかではないが、広く活動していたといえよう。また、『鎌倉市史近世史料編』所収の後藤家に現存する「註文帳」には先に述べた通り、注文主も様々な寺社が見える他、名主や個人の名も散見され、顧客の層も幅広かったことが読み取れる。

【註】

*** 『鎌倉地方造像関係資料』第三集から第八集、『鎌倉の彫刻』、『鎌倉彫後藤家四代』、『明治鎌倉彫 三橋鎌山とその伝統』、秋山一雄『横浜市北部における鎌倉地方仏師の活動』、上杉孝良『横須賀における鎌倉地方仏師の事績について』、緒方啓介『藤沢市域における近世仏師の動向(上)(下)』、清水真澄『小田原の彫刻史と「小田原仏師」、三山進「川崎市域における近世仏師の動向」をもとにGoogleマップで作成した。図中の丸は後藤家が携わった像がある寺院の場所を表し、緑は造立、紫は修理、ピンクは修理に参加、茶色は再興、彩色・補造、灰色は仏像以外の位牌や額、黄色はそれ以外、というように色分けしてある。現在は廃寺となり場所が分からなかったものや個人宅などは省いた。

【表二】宝暦九年〜十四年
(35)
後藤左近注文一覽(二部)

年・月	依頼主	内容	値段
宝暦九(一七五九)年 七月	土沢景察院	《制作》 不動尊一体 新木にて、火炎や 台座・礼盤など	一両 (うち前払い二分)
〃	野村名主 彦四郎 岡右衛門	《再興・彩色》 地藏尊一体、岩座 など古仏様再興 十王様 同諸仏 十六体彩色	一両二分
〃	千木羅 薬師堂庵主	《再興》 薬師如来一尊	三分(七月二十日に一 分一貫六百五十文受 取、善勝寺より残金支 払い約束)
〃	川賀沢の 経泉寺か 名主	《制作》 如来尊 一体新木 にて、後光・台座など から様	三両二分(前払いで 一両二分か、後日一両 三分受取)
〃	田名 宗祐寺	《制作》 地藏尊一体 新木にて後光・台座 至眼など	像 分二分一朱 至眼分二分一朱
〃	田名名主 五郎左衛門	《制作》 如来尊一体 新木にて後光・台座 御すし内塗りなど	一分二朱
宝暦九(一七五九)年 十月六日	角田 福泉寺	《制作》 薬師如来尊、日光 月光	三両一分二朱(手付金 一分受取、後日制作分 受取)
宝暦九(一七五九)年 十月〜十一月か	大嶋村 長徳寺	《制作》 地藏尊、うつすし 薬師、厨子下受け	一分五十文
宝暦九(一七五九)年 正月二十九日	山口 正覚寺	《制作》 位牌一本(相たけ 横二寸二分、相たけ 一尺三寸五分、 取り三つ台)	三百文と二十文
宝暦十二(一七六二)年 二月二十九日	見影村 常寿庵	《制作》 不動明王(しやう ねんつし)、位牌一本	四十文 不動明王一分 位牌六百文 (手付金二分受取)

年・月	依頼主	内容	値段
宝暦十二(一七六二)年 三月二日	与瀬村 慈眼寺	《制作》 位牌(相たけ二尺、 袖付き)	一分二朱
宝暦十二(一七六二)年 三月三日	与瀬中野村 長福寺	《制作》 地藏尊一体 丈一尺四寸、至眼 入り	二両二分(手付金二分受 取)
宝暦十二(一七六二)年 三月四日か	山口 庄兵衛	《再興・制作》 千手観音再興、台座、 後光制作	地漆二百目分三両、ほ かに一両受取
宝暦十二(一七六二)年 三月十日	大幡 御隠居	《修復》 不動尊一童子、漆、 台座、火炎	四両
宝暦十二(一七六二)年 四月日	津久井河天 村 巴察院	《制作》 なわかけ不動尊、 厨子入り	一分
宝暦十二(一七六二)年 五月日	若柳 宝福寺	《再興》 薬師如来十二神、漆仕 上がり、瀬々漆入用次 第に下され候て六月 より御細工仕候(同厨 子箱塗り、同地藏 尊再興、同 如来尊厨子塗り)	薬師如来 二両 薬師如来厨子 一両一分 地藏尊 一分 如来尊厨子 二分
宝暦十二(一七六二)年か 月日不詳	寸嵐村 宝源寺	《再興》 如来尊一体、洗たく 再興	二朱
宝暦十四(一七六四)年 月日不詳	下長房 東照寺	《再興・彩色》 観世音様、後光台座彩 色	一両三分
宝暦十四(一七六四)年か 月日不詳	川名 祥泉寺	《再興》 文殊普賢	一両
宝暦十四(一七六四)年か 六月十三日	長安寺	《制作》 聖徳太子像二体	三両一分
宝暦十四(一七六四)年か 十月十一日	小山宝泉寺	《制作》 御本尊船後光	一両二分
西 四月二十一日 年不詳	御隠居	不明	一両二分(酒ふるまい)
申 八月 年不詳	三浦久野谷 岩殿寺	《再興・制作》 観世音様再興、 位天様(制作)	二両九月十日、和尚様 手付金二分持参、和尚様 に酒三升こわめし一斗 渡したか

このように、鎌倉だけにとどまらず様々
な地域からの制作を担っていた後藤家だ
が、鎌倉での立ち位置はどのようなもの
であったのだろうか。次の章では、注文主
との交流から、後藤家を含む鎌倉仏師た
ちの姿を見ていきたい。

第二章 略

おわりに

本稿では、第一章で近世鎌倉仏師につ
いて、その出現から変化までの流れや活
動範囲、関係性などを述べたのち、第二章
で寺院・大名という二者に焦点を絞り仏
師との関わりから鎌倉仏師たちの立ち位
置を探った。村内にある寿福寺とは物の
贈答があったり世話人を務めたりと近い
関係にある上、母里藩松平家にとつて後
藤家は仏師であることに加え、鎌倉寺院
との仲介役を頼める存在であったことが
分かった。今後は今回検討が及ばなかつ
た寿福寺以外の寺社との関係や「勝五郎」、
「盤庵」といった個々の人物について考
察できるような史料を精査していきたい。
また、ここで触れることができたものに
ついてはさらに検討する余地があるもの
も多い。以上を今後の展望として、本稿
のまとめとしたい。

写真集紹介

○写真記録集『古都鎌倉へのまなざし』を出版

近代史資料室でこれまで収集してきた写真の中から、昭和30年代から50年代の写真を中心に地域別・テーマ別に編集し、現在の写真と比較しながら、移り変わる鎌倉の姿を一冊の写真集にまとめました。



古都鎌倉へのまなざし
1950-1985
時を見つめた写真家たち

◆目次

第1章 鈴木正一郎 鎌倉を見つめた28年間の記録

第1節 くらしと人々

第2節 町の風景～地域に見る鎌倉の今昔

第3節 変わる鎌倉～未来に残したい美しい景色

第2章 皆吉邦雄 北鎌倉の小さな写真館から

鎌倉五山円覚寺近くにて／鎌倉カーニバル

第3章 安田三郎 鎌倉国宝館カメラマンの奮闘

文士・文化人を撮る／空から見る／月刊「鎌倉市民」

の時代

○刊行にあたって

本書作成にあたり、クラウドファンディングをはじめ、多くの方々からご支援、ご協力をいただきました。また、鎌倉ゆかりの知識人の方々も寄稿してくださいました。心より感謝申し上げます。その中から、養老孟司先生のコラムをご紹介します。



国鉄横須賀線 鎌倉駅東口
昭和43年5月 鈴木氏撮影
トンガリ屋根の時計塔は現在、駅西口広場に移築復元されている。

本書には、同時代に鎌倉を写した鈴木正一郎氏、皆吉邦雄氏、安田三郎氏の3人の写真家の写真をおさめました。深く温かいまなざしがとらえた風景は、過去からの大切な贈り物です。これらの写真を前に、様々な対話が生まれ、異世代の人々が交流し、残したい空間や空気を感じながら、未来の鎌倉のイメージを育むことができれば…という思いも込めました。

古い写真

養老孟司

時を経た写真は面白い。写真には特定の撮影目的があったり、光線の具合や行人の有無など、その時々が行き掛かりの事情があったりして、撮影者の意図が始めは目立つが、時とともにそれが薄れて、あいまいになり、やがてそうした意識的な部分は消えてゆく。そうなる、残るのは漠然としたその時の雰囲気、これが懐かしかったり、面白かったりする。

自分の記憶もこれに似ている。時とともに、次第に詳細という角が取れて、なんとなく雰囲気を感じ、という感じになる。写真はそこが少し違って、詳細が薄れない。撮影者がまったく意図していなかった詳細が残ってしまうのも、写真の面白さである。そこは撮影者からすれば、ノイズということになる。

ここに記録されている写真は、鎌倉生まれで、鎌倉育ちの私には、漠然と記憶している風景である。おかげであらためて記憶が刺激を受ける。「こんな感じだったなあ」と思うからである。

私たちは自分で記憶していると思っていない記憶を持っているらしい。そのことは、脳を直接に刺激して得られた結果から知られている。古い写真には、そういうものを呼び起こす効果があるのかもしれない。自分のことなら自分がいちばんよくわかっている。多くの人はそう思っているが、本当にそうだろうか。古い写真はそこを突くのである。過ぎ去った過去が、どのように現在の自分を作っているのか。八十歳を十分に超えて、それを考えてみたりするが、とてもわかったものではない。古い写真はあらためてその種のことを考えさせる。有用か、無用か、それはその人の考え方次第である。

(写真集『古都鎌倉へのまなざし』コラムより)

○出版記念写真展を開催

【会期】令和5年

2月22日(水)～26日(日)


【会場】鎌倉生涯学習センター(きらら鎌倉)

地下ギャラリー

【展示資料】

- ・鈴木正一郎氏写真 134点
- ・皆吉邦雄氏写真 18点
- ・安田三郎氏写真 12点

写真展
古都鎌倉へのまなざし
1950 - 1985
時を見つめた写真家たち
主催 鎌倉市中央図書館



撮影 鈴木正一郎 1971年3月 福芳谷 石動地蔵堂にて

場所 鎌倉生涯学習センター(きらら鎌倉)
地下ギャラリー
期間 2023年2月22日(水)～26日(日)
9:30～19:00(最終日15:00まで)
鈴木正一郎氏、皆吉邦雄氏、安田三郎氏による戦後昭和の記録
写真集 2023年3月出版予定



○町内会でも出張写真展を開催

・佐助自治会(佐助自治会館)

令和4年11月6日(日)～13日(日)

～写真展～
写真で見る 佐助の 昔・今



一例 佐助-1 旧文藝会館前
約50年
昭和48年(1973)頃 鉄道の南入り口付近
約60年
昭和40年(1965)頃 佐助の 佐助 をご覧になれます (約20枚)



・大船まつり(鎌倉芸術館ギャラリー)

令和5年5月21日(日)



・材木座自治連合会(材木座公会堂)

令和5年9月26日(火)～28日(木)



材木座自治会連合の防災会議に合わせ、関東大震災被害写真と昭和の材木座今昔写真展を同時開催。公会堂の建物は大地震を生き延び、現在、修理され国登録有形文化財となっている。

・梶原山町内会 秋まつり(梶原山町内会館)

令和5年11月18日(土)～19日(日)



・NPOフェスティバル(きらら鎌倉)

令和5年12月2日(土)

●展示用写真パネルを図書館から提供いたしますので、今後とも町内会のイベントなどでご利用いただければ幸いです。市内全地域の写真があります。

●写真集『古都鎌倉へのまなざし』は、中央図書館2階カウンター、市内各図書館、鎌倉市役所3階行政資料コーナー、市内書店などで購入できます。ぜひ多くの方に手に取っていただきたいと思ひます。

—引き続き懐かしい写真をお寄せください—

古写真収集にご協力を



明治・大正・昭和・平成期の写真

鎌倉市中央図書館では昔の写真を集め、整理、保存、利用者へのご提供などを行っております。

収集した写真をもとに写真展を開催するほか、鎌倉近代史資料集の刊行時には資料として掲載するなど後世に伝え、役立てたいと考えています。鎌倉の風物や生活の一コマを記録した写真がございましたら、鎌倉市中央図書館近代史資料担当までご連絡ください。

古写真

木村康則氏提供

長谷駅前を進む鎌倉カーニバルのパレード

昭和32年 木村康則氏撮影



鎌倉カーニバルは、戦前には昭和9年から13年まで、戦後は昭和22年から37年まで、鎌倉の夏を沸き立たせたエネルギーな祭典のことです。

そもその始まりは「鎌倉文士」たちが海外旅行で見た「謝肉祭」を鎌倉へ輸入したものだと言われています。毎年、巨大な「主神」が造られ、町を練り歩きました。戦前は各地区の青年団が参加し、全国的な企業や鎌倉の商店がおもしろい仮装行列を練りひろげました。

戦後は、「復活カーニバル」と言ってやはり鎌倉文士たちが審査員や漫画集団として参加して、人出は最高潮に達しました。

戦前の鎌倉カーニバル 昭和11年

木村一郎氏(康則氏父)撮影



主神は、鎌倉海老に乗ったベティーさん。
衣冠束帯に身を包んだ久米正雄氏が大きく手を挙げている。



鎌倉駅前を練り歩く仮装行列

インタビュー(むかし語り) ⑨

広島の被爆体験を鎌倉で語り継いで

お話し 景山邦子さん

私は昭和9年生まれです。広島市内で育ち、戦争中は学童疎開で岡山寄りの西城という町で過ごしていました。父は外科医で、境町で外科病院(山崎外科病院)を開業していました。よく原爆炸裂の直下と言われた「島病院」から数百メートルのところでした。8月6日の朝早く父は住まいの川口町から病院へ出かけ、着いた頃、その場で爆撃を受けたので遺骨もわかりません。従業員も入院患者もたくさんいましたが、遺骨ばかりで見分けはつきませんでした。島病院の院長は原爆投下の前日8月5日に田舎の方へ往診に行っていたので、爆撃を受けませんでした。お互いに道で出会ったのが最後だったようです。

○爆心地から3キロの住まいで

母は川口町の家で下駄箱を掃除していて頭の中へ突っ込んでいたので、せん光を受けなかったようです。飛んできた物にも当たらなかった。火がおさまったので怪我をしなかったのです。火がおさまってから、母は市内の病院へ行きましたが、燃えて何もありませんでした。祖父母の家の周りも焼野原で、母が訪ねて行くと二人は放心した様子で立っていました。その時、二人は家の外

でしたが、物陰にいましたので光は浴びていませんでした。家の中にいた曾祖母は、呼んでも声がしなかった。家の下敷きになって即死したと思ひ、逃げる時、「行くからね」と手を合わせ、川の岸へ降りて、火事がおさまるのをじっと待っていました。川岸には怪我をした人がたくさんいて、川には死体がいっぱい流れていました。川口町の住まいは町の中心部から離れた、海に近い所にありましたので、直撃は受けませんでした。屋根や壁が壊れていました。

その後祖母は、川口町の家に来て、壊れてない部屋で「家があつて良かったね」と言つて畳の上で並んで寝ていましたが、髪の毛が抜け落ちたり下血して、8月終わりごろ亡くなりました。祖父は内科医でしたが、隣に寝ているおばあさんの脈を診るだけしかできず、「おばあさんは先に逝つたよ」と言つて次の日に自分も亡くなりました。二人はやけどもしないで、いいことが重なって静かに亡くなりました。

○似島(にのしま)へ逃げる

4人姉妹の2番目の姉は友達と二人で似島(にのしま)へ逃げました。瀬戸内海の似島は「検疫所」があるところです。二人は女学生で、朝から町なかで建物疎開の片付け作業をしていました。町なかの何も物陰がないところで被爆したんです。みんな泣きわめいていたところ、「海の方へ逃げろ」という兵隊さんの声で、二

人は手をつないで逃げながら、姉は「うちの父は医者です」と言っていたそうです。たくさんの人が逃げきて、軍のトラックで運ばれて、さらに船で島へ行ったようです。2番目の姉といっしょに亡くなった友人は、後年私が結婚した主人の妹でした。一番上の姉は少し離れた被服廠にいたので怪我をしなかったんです。2番目の姉の別の友達のえみちゃんは火傷で顔がくしゃくしゃになっていたそうです。自分が死ぬ数時間前でしたが、「隣の人に水をあげて下さい」と小さな声で言っていたんです。でもその隣の人はすでに死んでいました。姉(2番目の)は死亡者名簿にありました。遺品には、髪が泥でかちんかちんになっているのが少しと、下着の一部が粗末な封筒に入れてありました。遺体はどこにあるかわかりませんでした。島の小学校の校庭には死体が山のように積み上がっていました。えみちゃんがまだ息があるから、担架(戸板のようなもの)に載せて、町なかは歩けませんから川をのぼって、家の近くに来た時、姉(一番上の)がポーンと飛び降りて、「お母さん、えみちゃんが帰られましたよ」と呼ぶとえみちゃんのお母さんがけがをした身体で這うようにして、川のそばまで来られました。お母さんの声が聞こえたかどうか…。

一年後に市役所の人が来られて、平和祭をやるので話して下さいと言われて、母はわーと泣

き出し、「あの時のことは言わせないください」と言ったので、市役所の人が「もういいです、いいです。」と言って帰りました。

○「入市被爆」

私は、学童疎開をしていたので、何も知らされていませんでした。親戚のお兄ちゃんが迎えに来てくれたので一緒に帰ったんです。「入市被爆者」の手帳を持っています。原爆投下から2週間以内に爆心地から2キロ以内に入った人、そのために被爆した人に出されます。川口町の家が3キロ離れた所であり、そこで暮らしましたから 直接被害を受けませんでした。「被爆者手帳」を持っています。「入市被爆」と書いてあります。

○戦後の生活

父の医院は、壊滅状態ですから、生活の手立がありません。近所の人に、鶏を飼って売れば生活できるよと言われて、母は残った娘姉妹といっしょに頑張つて、鶏を育てました。餌をやれば育つし卵を産むので、生計が立ったのです。卵は、戦後は貴重品でした。川口町の家が200坪あったのでバタリー式の鶏舎にして、お米屋さんが持って来てくれた糠と野菜を混ぜてバケツに入れて練った餌をやり、鶏糞はお百姓さんが喜んで取ってくれました。育雛はストーブを焚いて温めて育てました。お見舞いと言えば卵、当時は卵は珍しかったんです。生み

落とされた卵を取って歩くのが私の役目でした。そうして母は私たちを育ててくれました。ただ、その後鶏肉は食べられません。母は現場にいましたが、運が良く長生きしました。ただ、70歳くらいで徐々に体調を崩して、ひどいリュウマチになったり、目が見えなくなつて、10年間寝たまま、92歳で他界しました。

○鎌倉へ

縁があつて私は鎌倉へ来ました。夫が防衛大 学校に勤めていたので、横須賀の官舎にいました。ある時友人であちこち見て歩くのが好きな人がいて、鎌倉を案内してくれました。 笹田に土地があるからと勧められ偶然住むことになりました。もう農業が出来ないからというお年寄りがいて、その土地を購入したのです。そこで「鎌倉市被爆者の会」に出会いました。たいへん熱心に展覧会や「語りべ」(出前講話)の活動をしていました。私は、自分はこの歳まで生きていますが、父や親族がたくさん死にましたので、熱心な会長さんにすすめられて2012年(平成24年)から語りべの活動をしてきました。そのほかに、平和行進デモの先頭を歩いたりビデオ撮影されたりしました。小学生と折り鶴も作ったりしました。そのときは若かったですから…。今は横浜に住んでいます。

—2023年10月7日横浜にて—

関連資料

(鎌倉市図書館所蔵)

DVD

・鎌倉市平和推進実行委員会
戦争体験シリーズ第6弾

伝えたい「広島」の記憶 令和元年

〜景山邦子さんの証言記録〜

企画制作鎌倉市・鎌倉市平和推進実行委員会
(なおDVDは第1〜第6弾まで図書館にあります)
冊子

・「平和を考える」平和都市宣言30周年記念誌

鎌倉市 1985年7月

・「伝えたい 平和への願い」2019年4月

平和都市宣言60周年記念誌

鎌倉市平和推進実行委員会 鎌倉市

新聞記事

・平和つなぐ広島被爆76年「核問題、誰もが当事者」遺骨なく「消えた」といこ 鎌倉市被爆者の会会長網崎万喜男(神奈川新聞)2021年8月7日)

【後記】資料室便り第9号をお届けします。2024年元旦の穏やかな一日があのような大震災の惨事で始まるとは、だれが予想したでしょう。今は命をながらえ町が昔の姿を取り戻すことを願うばかりです。いつかその記録を残す余裕が出てくるのでしょうか。昨年は多くの方々にお世話になりました。『関東大震災100年』を振り返ることと、図書館編集の写真集『古都鎌倉へのまなざし』発行に全力を注ぎました。みなさま方のご協力に心より感謝申し上げます。

「近代史資料室だより」第9号

発行 鎌倉市中央図書館近代史資料担当

令和6年(2024年)2月10日